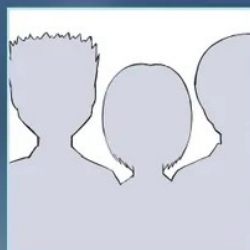


成人向け

ねどらる！

幼馴染が撮影にかこつけて
エロいことされてしまった件





「おら、たける
おまえ掃除しとけよ」

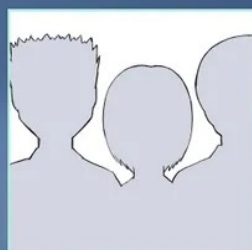


『う、うん』

たけるは気が弱く
いじめられていた。



「こら、あんたたち！
また、たけるに当番おしつけて」



「ひっ、ちさだつ。
ご、ごめんなさい」

ちさはたけるの幼馴染で、
空手を習っており、男子から恐れられていた。

『ありがとう』



『まったくなさけない』



『いゝめん……』



たけるは、ちさに頭が上がりなかった。



「はあ、
またやっちゃった」

ちさは先程のたけるとのやり取りを後悔していた。
たけるのことは幼いころから好きだったが、
暴力的なちさにたけるはおびえてしまっていた。
そのため、ちさはたけるの前では、
何とか女の子らしくしようとしていたが、
ついつい、愛情の裏返しでたけるには
厳しく接してしまうのであった。

そんなことを考えながら、気晴らしに
繁華街を歩いていると、



「ねえ、その君」



「なんですか」

見知らぬ男性に話しかけられる。



「いや、かわいいなっと思って」



「えっ」

ちさは、からかわれてるのかなと思ったが……



「ほくはね、
モデルのスカウトなんだよ」



「えっ」



「きみ、モデルやってみない？」

普段ならこんな誘いは断るのだが、
たけるの件で落ち込んでいたことは、
話だけならとついていってしまっただけ。

事務所



『どうぞ』



『あ、はい』

ちさは、仕事内容について説明を受ける。



『ためしにちょっと撮ってみない？』



『いや、そんな』

結局押し切られて
写真をとることになった。

カメラマン
「いいね、かわいいよ」

「そ、そんなこと……」

女の子としてほめられることに慣れてないちさは、
かわいいなどと言われると、ついついうれしくなって
気が緩んでしまうのであった。

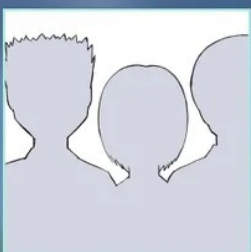


それから、しばらくして



「んっ？」

教室の隅に男子が集まっている。

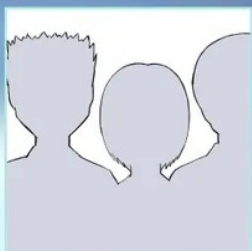


「……」



「……」

またたけるのをいじめているのか、
懲らしめてやらねば、と近づくと……



「メイ」

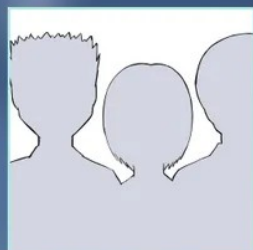


「ちよつと」

見れば、こないだ撮ったちさの写真が載った雑誌を皆で見ているようだった。



『うん』



「すいな」

男子たちは逃げてしまった。



「うーめん」



「別に謝らなくていい」

別にちさは怒ってなどいなかった。



「それよりどうだった」



「うーめん、
よ良かったよ」

その答えにちさは満足した。

事務所



「あの、この仕事
やってみよう」と



「ほんとに？」

ちさは、この仕事を
本格的にはじめることに決めたのだった。

たけるの家



「き、今日は何のよう？」



「これ、こないだ撮った
イメージビデオなの。
一緒に見ようと思って」

ちさは、あれからグラビアの仕事は何本かこなし、
イメージビデオをついに出したのだった。



「そ、そうなんだ」

そして、それをいの一番にたけるに見せようと、
わざわざたけるの家まで押しかけたのであった。



映像には水着姿ではしゃぐちさが写っていた。

「この水着どう？」

「うん、似合ってると思うよ」

『水着、小さくない?』

たけるは、最近ちさの水着が、
きわどくなっている事を心配していた。

「これぐらいがやりなんだって」



次は寝かされてマッサージされているシーン。

（ちさちゃんのおっぱいが
他の人に揉まれてる）

たけるはちさの事を恐れてもいたが、
本音の部分ではちさの事を好いていた。
そのため、他人の手に触れられている
ちさを見て内心嫉妬していた。

「これ、ただのマッサージだから」

「そうなんだ」

「マッサージしてるの、女の人だからね」

「男の人の手に見えるけどそうなんだ」

（ほんとに男の人だけ……）





(ちさちゃんのおっぱいがあんなに……)

たけるは食い入るように見ている。

(たけるが、私の体に興味もってくれてる。
はずかしかったけど、がんばってよかった)

次は下半身のマッサージ。

(ああ、お尻ももまれてる)

たけるは女の人の手と聞いても、
ちさの体が他人の手に触れられることに
嫉妬せざるを得なかった。



かなりきわどい所をさわられるちさ。

「こ、これもマッサージなの？」

「そ、そっだよ」

(さすがにこのシーンは恥ずかしい)





次のシーンは目隠しして何を食べてるか当てるゲーム。



次にちさはソーセージをくわえさせられる。

(「う、これは、まるで……」)

ちゅぱちゅぱ音を立てながら、
ちさはソーセージをくわえてる。



最後は後ろからのアングル。

「この格好、まるで……」

「ただ、こういう格好してるだけだから」



ちさは、まるでセックスしてるかのように、
動いている。

「格好だけだから」

「う、うん」





「どう」



「すごくよかったけど……
他の人に触られてるのを見ると
なんだか……」

（たけるが嫉妬してる……
がんばってよかった）



「さわってみたい？」



「うん」

「こうして、ちさとたけるは結ばれました。」

撮影記録



「こ、この水着
小さくないですか？」

スタッフ
「これぐらい当たり前だから。
似合っで、かわいいよ」

「そ、そうなんですか」

次に渡された水着は……

「この水着は……」

「すごくセクシーだよ、
男子もいちころだよ」

男子もいちころという言葉に
ちさは抗えない。





「ちょっと、水着調節するね」

「きゃん」

（やだ、水着が股間に食い込んで……）

ギュッ

グイッ



（そんなぐりぐりされたら）

んん

『んと、こんな感じかな』

プルッ

グイッ

グワッ



「ううかな」

(まじになった)



「ひぐっ、
だ、だめ」

「やっぱりこうだね」

「撮影だから我慢して」

「は、はい」

グイッ

グイッ



撮影が進むにしたがって、どんどん過激な格好に……

「これって
水着じゃ……」

（ほんと裸だよ）

「大丈夫、大丈夫。
これぐらいみんなやってるから」

「け、けど……」

「まずかったら後でカットするから」



刺激を受けたちさの股間は濡れてしまっていたのだが、
言い出せずにそのまま貼り付けてしまったため、
剥がれてきてしまった。

「やだ、はがれちゃう」

パロンッ



「付け直してあげる」

「なんだかぬるぬるして
つかないな」
スタツフがちさをからかう様に言う。

「はい」めんなさい

グイッ



「ごめんなさい」

「撮影中に変な声ださないで」

「あーん」

「ジュン」

ぐりぐり



次はマッサージのシーン。

（おっぱい、男の人にもまれちゃってるよ）

「どう、気持ちいい」

「ほ、ほら」



「んんっ」

（やだ、この感じなんだろう）

ちさは、性的な快感に戸惑っていた。

（やん、さらに激しく）



ちさのおっぱいは
スタツフに揉みしだかれ、
さまざまな形に変容する。

「んんっ……んんっ」

(たける以外の男の人に、
おっぱい揉まれて……
どんどん気持ち良くなっていつちゃうよ……)

モッ

モッ



気付けば、水着がずれている。

(だ、大丈夫だよ、写らないようにしてくれるよね)

ちさは快樂によって、
ビデオにさえ写らなければ乳首を見られることに
抵抗がなくなっていた。



「んんっ」

ちくびを思い切りつままれるちさ。

ギョッ

性的な刺激がちさを襲う。

(マッサージで気持ちよくなってるだけだよね)



水着の上からマッサージと称して股間を刺激されるちさ。

(あそこ、ひろがっちゃう)

グイッ



「もっと、気持ちよくしてあげるね」

「えっ」

「大丈夫、大丈夫、
写らないようにしてあげるから」

プリン

スルッ

ちさは直接あそこを広げられる。

(だめだよ、もうこんなのマッサージじゃ……)

しかし、ちさはそう思いながらも
拒絶することができなかった。
更なる刺激を心のそこで
期待してしまっていたのだった。

フハッ



『んぐっ』

(なに……この感覚)

ちさは、あそこを直接触られ、
今まで感じたことのない刺激に戸惑う。





『んん』
ちさは必死で声を漏らすまいと我慢する。

(やだ、なにかくる)

ズブッ

ちさの中に男の指が入る。



激しく指を出し入れされる。

『んあっ』

マッサージされて
気持ちいいだけだから

じゃふっ

じゃふっ

じゃふっ



ふいに指が抜かれる。

『えっ』

(やめちゃうの……?)

『どうしたの』

『いいえ……』

『じゃあ、次の撮影へ』

『あ、はい』

「じゃあ、口を開けて」

(次は何だろう?)



「つぎはこれだ」

そういつてスタッフの一人が、
局部を露出させる。

むろん、ちさにはそれが見えない。



男は露出させた局部をちさにくわえさせる。



(なんだろう、これ)

パロ

ちゅぷっ

パロ

(ひよつとしたらこれって)





「んぐっ」

男はさらに奥まで押しこむ。

ちゅぷっ

ちゅぷっ

(喉の奥まで...)

ちゅぷ、

「じゃあヒントだよ」

どゅるっ

どゅるっ

口の中に勢いよく精液が発射される。

(中に出されちゃってる……)

「これでわかったかな」



『わ、わかりません……』

(き、きつとべつのなにかだよ……)

ちさには答える事ができなかった。

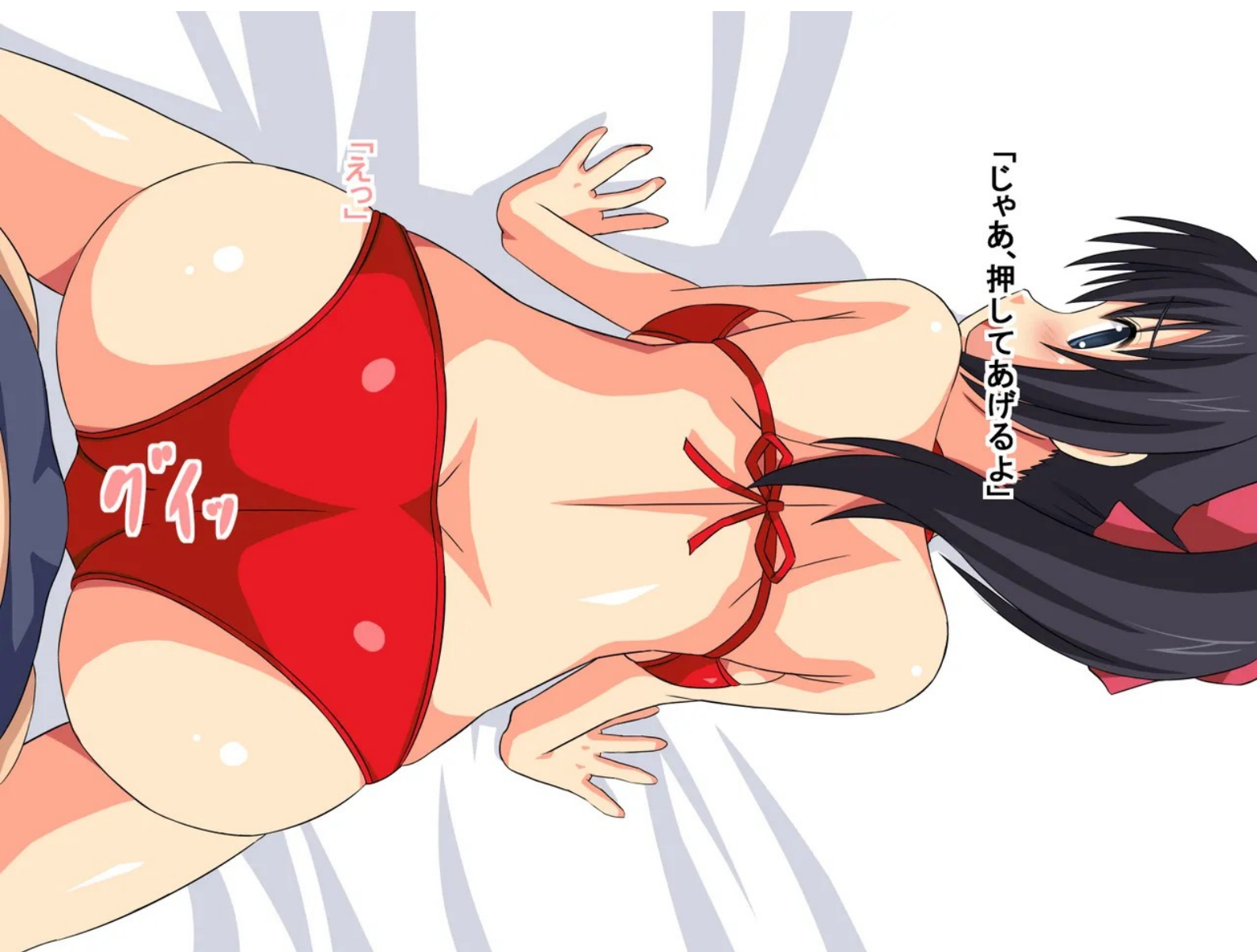


「じゃあ、ちよっと本番やってるみたいに動いてみて」

「どっという風にですか」

経験のないしさは、どうすればいいかわからなかった。





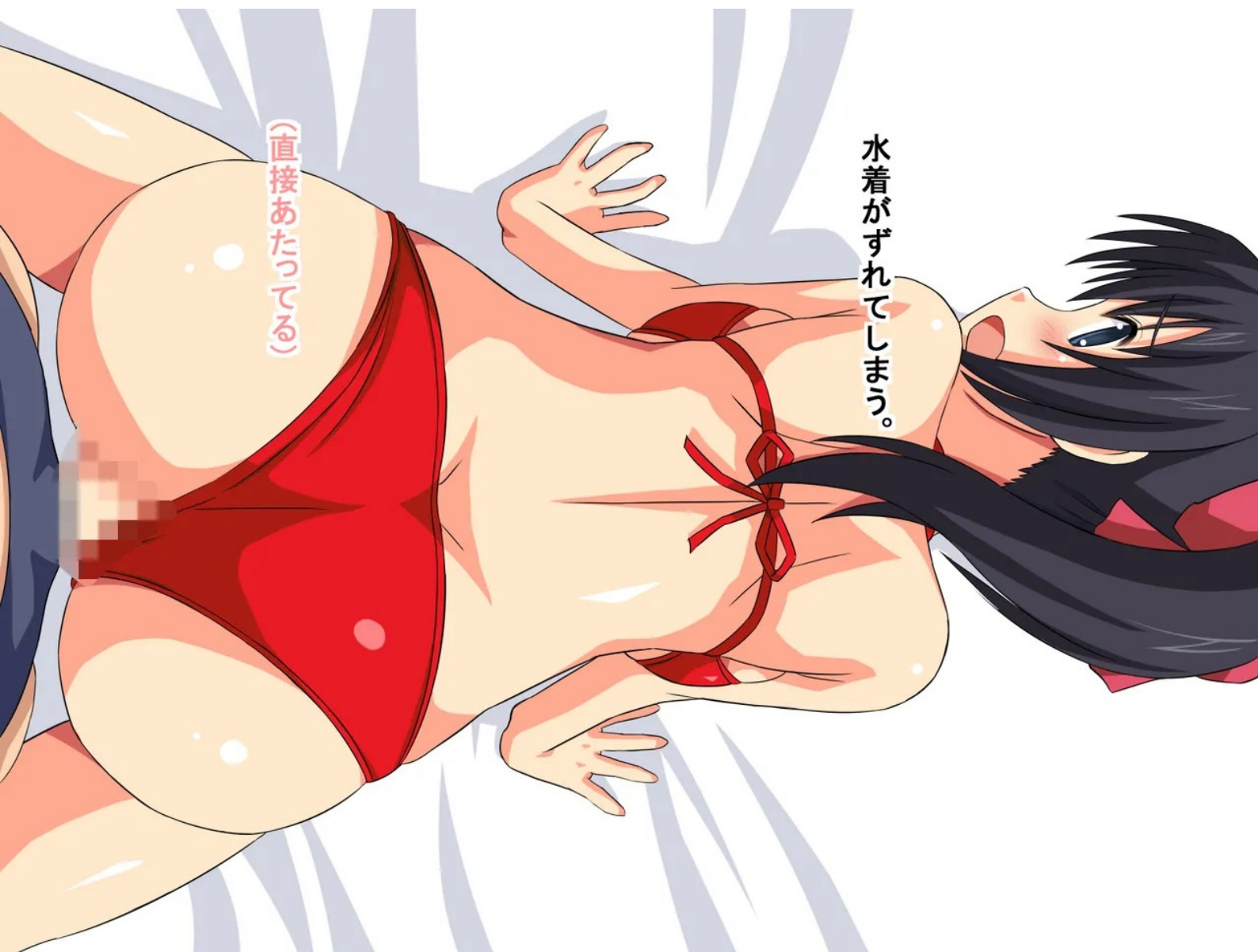
「じゃあ、押してあげるよ」

「えっ」

グイッ

水着がずれてしまう。

(直接あたってゐる)





「ひゃん」

(え、これって)

ちさの股間にむき出しのあれが押し付けられる。

「臨場感出すためだから、気にしないで」



「んあああつ」

(やだ、入ってる)

「ああ、「めん」めん。
ちよっとはいっちゃったね」

「だだめ、
抜いてください」

ズパッ



「あああつ……んくつ……」

（おくまで、挿入されちゃってる）

「ううっ……ぐすっ……
抜いてっていったのに」

「ごめん、ごめん、けど今すごく
いい表情してるから、
絶対受けると思うよ」

ズッ



「げ、けど、こんなの……」

「大丈夫、大丈夫。
挿入部分は写らないようにしてあげるから」





「ああああああん」

(中に出されちゃってる)

「ああああああん」

じゅぽん

じゅぽん



撮影終わって。



「どうだった？」



「すごく楽しかったです。
今後もし生懸命がんばります」

（こんな気持ちいいこと、やめられないよ）

























































































